
『東西南北2009』 発刊にあたって

『東西南北2009』をお届けします。

本号は、2008年度に実施した日本・インドネシア国交回復50年を記念したシンポジウムの報告を特集としました。国交回復という転換点に位置するものは、第二次世界大戦時賠償交渉の終了と、講和条約の締結ですが、戦後の日本においては、賠償交渉の存在自体あまり知られてこなかったと思われます。そこに、今日の日本・インドネシア関係、さらには日本・東南アジア関係における問題点の一つがあるともいえるでしょう。和光大学では、2004年12月のインドネシア・スマトラ沖大地震に際し、広く草の根の被災者救援活動と交流に取り組んだ経験を有しています。それを踏まえた今回のシンポジウムは、資源・エネルギー問題と人材交流・移動問題という今日的課題を取り上げておりますが、資本や資源、労働力の移動の検討という課題を越えて、今後の日本・インドネシア関係のありようを模索する試みでもあります。

また、学術企画の記録を3本掲載することができました。一つは、本年度に催した保育問題のシンポジウム報告です。本学に「保育」を学ぶコースを設置する論議とも関わって、今日的な「保育の質」を論じたものです。現代社会論・教育論でもあります。

他に講演記録類が2本です。ポール・ギルロイ氏の講演記録は、2007年のものですが、取りまとめの都合で本号への掲載となりました。黒人たちの音楽文化、思想をめぐる研究で国際的に注目を集めている方をお招きした学術企画での講演記録

です。論者を知る方も未知の方も、さまざまに社会的歴史的視野が広がったのではないかと想像されます。

2009年1月に開催された庄野真代氏の講演とコンサートは、前者とやや趣を異にします。音楽を通じた社会活動とそれを熱心に続ける庄野氏の思いの一端を知ることができるでしょう。

さらに、日本への最初のモンゴル人留学生に関する論文は、モンゴル人の日本留学100周年を記念して催した2006年学術祭での報告です。和光大学総合文化研究所が長く蓄積してきた独自の研究分野の一つであるモンゴル研究に連なる研究です。

そして、国際理解教育に関わる研究プロジェクトの成果報告は、十数年来、和光大学が地元岡上地区との間で積み重ねてきた、研究・教育・生活文化的交流の試みの一実践報告です。

こうしてみると、改めて掲載論考の主題が多岐にわたることに気づかされますが、それは、本研究所所員の研究的・社会的関心を示すものということもできます。諸論考が提起したものを、何らかの形で受け止めて頂ければ幸いです。

和光大学総合文化研究所所長 山村睦夫